
A sleeping forrest

とらくろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A s l e e p i n g f o r r e s t

【Nコード】

N 3 4 0 2 X

【作者名】

とらくろ

【あらすじ】

ある日、翼を手に入ってしまった少女のお話。翼と共に手に入れた力と共に少女は戦場へ。
救いを願った少女の祈りが起こすのは、。。。

プロローグ

それは、遠い遠い昔話。

遠くも今なお続く、一人ぼっちの魔王の物語り。

決して許されることのない恋。

叶わぬ恋に狂った魔王は、姫に呪いをかけ、それは国すら飲み込む眠りと呼んだ。

国とその全てを一夜にして森に変え、その魔王は佇む。

これは今も続く遠い遠い昔話。

「これが俺が知っているこの森の言い伝えの内容だ」

俺は子供の頃から何度も聞かされた御伽噺を話していた。

「・・・やはりそんな風に伝わっているんですね」

焚き火を挟んで対面に居るのはフードを目深に被った女性。フードのせいで表情は口元以外は見えない。

俺達は、森の中に居る。

魔王が想い人を眠らせる為に作り出した眠りの森。
さっきの御伽噺のにあった森だ。

いや、さっきから御伽噺と言っていたが、それは違う。
これは、実話だ。事実だ。

「それで、どうして貴方はここまで来たのですか？」

言葉からは警戒が感じられた。表情は見えないが口調にこちらに対する険がこもっていた。

「質問を質問で返して悪いが、そういうアンタこそ、どうしてこんな所にいる？女性が一人で居るにはここは少々危ない場所のような気がするんだが？」

膝が震える。

遠くで仲間達の叫び声が聞こえた。
俺は恐怖に震えながら、会話の主導権を握られないよう意志を込めた眼差しで相手を睨んだ。

「・・・私ですか？私がここにいるのは当たり前でしょう？だって、
、、」

叫びが少しずつ止んでいく。

震えは止まらない。全身にそれは広がっていた。

ズズン！！！！

突然の揺れだった。

地震、、視界がぶれて立っていることもままならない程の大きさだった。

彼女は大丈夫かと一瞬考えたが、目につく範囲には居なかった。

地面に膝をついたまま揺れがおさまるのを待った。

立ち上げられるようになった頃には焚き木は消え、完全に暗闇が周囲を閉ざしていた。

夜の闇ではない。今は昼間だ。

単純に森が陽の光を遮断している。

それだけでこの森の異常さが分かるだろう。

この森は外部からの全てを拒絶している。

俺がどうしてここに来ることができたのかが分からない。

「私が魔王ですから」

不意に耳に囁かれた言葉に俺は剣を抜き絶叫と共に理性を手放した。仲間達の叫びは、もう聞こえなかった。

異常な光景だった。

数百、いや、千に届くであろう兵士達が蟻のように森に群がる。四方から剣を使い、槍を使い、弓を使い、火を使い森に群がる。しかし、殆どの者は森に達する前に屍に変わっていた。

森から何かが伸びる。

兵士たちを貫き、絡まり、森に引きずり込む。それは茨だった。

触手のように伸びたそれは血を吸い、暴れ、千切り、乱舞する。引きずり込まれた先からは何かが潰れる音、絶叫。後は何も残らなかった。屍がある者は寧ろ幸運か。

その光景の中で更に際立って異常な場所があった。

森の唯一の入り口。

そこは茨で閉ざされず、無防備に暗闇が晒されている。

その前に立ち、森を守る一人の騎士。

一振りの長大な剣を持ち、全身を黒の鎧で覆った謎の騎士。

その騎士を百程の兵士達に取り囲んでいる。

だが、兵士達はそのまま一人として騎士に近づけずに居た。
分かっているのだ。

森の茨よりもその騎士の方が自分達にとって死に近い存在である事を。

騎士の周りは赤に染まっていた。
迂闊に近づいた前列の兵士達は、既に肉塊へと変えられていた。

兵士達は全員震えていた。

今から自分達が死ぬ事を確信して震えていた。

逃げ出すことはできない。

敵前逃亡は、軍隊において死刑である。

国から逃げれば良いのかもしれないが、そうならば家族や友人とは二度と会えない。

その上逃げ出した兵士の情報は周辺諸国に回り、まともな生活も二度とは期待も出来ない。

かといって、目の前の騎士に戦いを挑むという選択肢を誰も選ぶことはできなかった。

たった一振りだったのだ。

騎士が振るった謎の斬撃は、一度に数十の兵士を殺し、肉の塊になり果てた物が津波のように返り降り注いだ。

兵士達の誰もが戦意を失い、騎士の周りには赤で塗られた空白地帯が出来上がっていた。

遠くで、砲撃音が聞こえ。

砲弾が風を切り裂く。

着弾。

吹き飛んだのは兵士達だった。

自分達がまだ居るのだから、ここに向かって撃たれた物ではないだろうと。

そう思っていた兵士達の何人かは数瞬後に吹き飛んでいた。

撤退命令も出さず、兵士を置き去りにしたまま軍は砲撃を開始した。どういった理由で軍が兵士達ごと殲滅しようと思ったかは彼らに分かりようもなかったが、後ろから撃たれて、ようやく彼らは逃げ出した。

砲撃の雨が兵士に、騎士に、森に降り注ぐ。

砲撃が長引くにつれて、絶叫は消えゆく。

やがて砲撃の音のみになり、、、、それも消えた。

山すらその形を変えるであろう鉄の雨。

土煙が森があつた場所を覆い、静寂が満ちる。

何も生きている筈がなかった。

異常なのは、、、、そう、これは人と人との戦争ではなく、森と人との戦争であること。

この世界の歴史の中に竜や魔王との戦争は幾らでもあり、繰り返されてきた。

その歴史の中で最も長く、最も深刻な脅威となっているのは現在この森であつた。

何時からそれが始まつたかは分からない。

だが、それは気づけば少しずつ、少しずつ世界を蝕んでいった。

小さな家を。

近くの森を。

村を街を国を。

加速度的にその侵食は早まり、近隣諸国の軍が動くのは早かった。

まず調査隊が全滅。

一個小隊。

そして、何度目かの軍が今、。

土煙りが晴れた。

まず見えたのは、抉られすぎた大地。
緑に包まれていた草原は跡形もない。

先数年は、草一本生えないだろう。

正に「荒野」。

そしてその荒野に立つ黒騎士。

砲撃前と変わらぬ姿で立つ黒騎士がまだそこに居た。
森も変わらずに健在だった。

焦るように再び開始される砲撃。

着弾。

確かに、騎士にも森にも直撃している。

また着弾。

誰かがやつと気づいた。

森より少し離れた中空で砲弾が爆発していることに。

誰もが気づいた。

砲弾が壁に阻まれていることに。

茨の壁。

分厚く絡まった茨の壁が砲弾を全て防いでいた。

騎士の前にも壁ができ、その身を守っている。

四方から降るそれ一発一発を漏らさず、受け、叩き落とし、更には
投げ返し反撃すら始めた。

終わりだった。

成す術のない兵士達が撤退を始める。

これ以上は被害を増やすだけだと判断したのだろう。

砲座を置き去りに我先にとその場を放棄し逃げ出す。

砲撃距離程離れていても、本来それは森の攻撃範囲内であった。

歩兵に邪魔されその対応に追われていた茨が騎士に這い集まり始める。

それは、さながら蛇の群れ。

勝利に喜び勇み騎士の剣に纏わりつく。

剣に集まり、剣は槍に、槍は塔に。

次第に巨大に強大に。

最後の鉄槌。

武器と言うのもおこがましいそれを騎士は片手で振り上げていた。

晴天の空に突如出現したバベルの塔。

天の怒りに触れたそれは、崩れ去る運命。

その塔は空を飛んだ。

逃げる軍勢に向かつて。

騎士が投げたのだ。

槍投げのようあまりにもあっさりと。

低空を滑るように飛ぶ茨の塔。

轢かれ、潰されてゆく全て。

地震に近い揺れ。

ズズン！！！！

鉄槌は下った。

塔は崩れ、崩れた先から元の茨に戻り侵食を再開する。

生き残った兵士を喰らいながら。

四方にあった軍の一方が一瞬で森と化す。

万単位の間人間が消える一瞬。

あまりにも圧倒的で馬鹿げた力。

これが、この世界を蝕む物語。

それは遠い遠い昔話。

今もなお続く、たった一人の魔王の物語り。

プロローグ（後書き）

間違えて、同じ小説を短編で出してしまった、、。

もし、そちらを見て下さった方がいたら、大変申し訳ない。

こちらでゆっくり暗い話を展開いたします。

どうぞよろしく。

第1話 「翼をください」

これは、一人の少女のお話。
神様に翼を願った一人の少女。

その願いに穢れは無く。
その想いに我は無く。
その意志に罪は無く。

それでも禁断へと至ってしまった。
深い森に繋がる一人の少女のお話。

「お母さん、私、空が飛びたい」

最初は幼い私と母の他愛のない会話から始まった
何か嫌なことがあったわけではない。
ただ漠然と空を飛ぶ鳥を見て、私にも翼があつたら、と。
そう思った。

「ふふ、、なら神様にお祈りしなさい。毎日お願いをしていればきっと神様は貴方に翼を与えてくれるわ、マリア」

この世界で信じられている創造神の石柱。

母はその敬虔な信徒だった。

私もその影響で休日には教会で母に伴ってお祈りをしていた。

私は信じた。

母の言葉と神様を。

それから私は毎日祈りを捧げ、お願いをした。

神様、私は空を飛びたいです。

私に翼を下さい。

毎日、毎日ただ祈りを捧げた。

周りの人々はそんな私を幼い子供特有の夢見がちな行動として暖かい目で見てくれていた。

普通であれば、そのまま空を飛ぶことも出来ずに私は大人となり、幼かった自分を微笑ましく振り返ったのだろう。

けれど私は普通ではなかった。

ある日、私は夢を見た。

神様が夢に出てきたのだ。

そして、私に言った。

「いつも熱心にお祈りを捧げてくれる君に御褒美をあげよう。君が夢から醒めたら背中に翼が生えている。君は空を飛ぶことができる。祝福しよう、君を」

結果から言えば、それは神様なんかじゃなかった。
私の願望が見せた偽者の神様だった。

ただの夢。

それでも、私は信じた。
信じてしまった。

偽者の神様を。
偽物の世界を。
偽物の翼を。

そして、目を醒ました私の背中には翼が生えていた。

普通の人間であれば、ある日娘に特大の羽が生えて、自由に空を飛び出したら発狂するだろう。

だが、私の両親は割とすんなりとそれを受け入れていたと思う。

「神様って本当にいるのね、」と敬虔な信徒らしからぬ母の発言が印象的だった。

父は「俺の娘はあらゆる意味で天使だったのか、」と親バカな発言をして、うっとおしさが二倍位になっていたように思う。

家族達にはこうして何の問題も無かった。

私が住む村の人々もこんな感じだった。

その日、私はそのまま両親の農作業を手伝って畑に居た。

畑を見たら鎌を持った天使が草刈をしているのだ。

村人からしたら、自分の正気を疑っただろう。

当時のことを思うと私もよく平気な顔で外に出ていたと思う。

村は混乱に陥ったというより、湧いた。

村の同年代の友達の騒ぎようはそれは凄かった。

よってたかって私の翼を触ろうとしたのだ。

中には羽を抜いて行こうとする友達もいた。

そんな友達は父に逆さ吊りにされていた。

父、過保護過ぎる。

大人達はそれに輪をかけて凄かった。

お爺ちゃん、お婆ちゃんは天使様ありがたやとお祈りと貢ぎ物をしていた。

私の好物のお饅頭が目の前で山積みになって、一人では食べきれず、結局友達と分けた。

その日の内に村全体で天使様万歳と何がありがたいのかも皆分からないのに宴が開かれた。

教会の牧師様も酒を飲んで陽気に笑っていた。

田舎の人々の順応力は凄いと思う。

そうして、ある程度村の皆の興奮が落ち着くと私はそういう者として受け入れられていたのだから。

水が上から下へ流れるように、森の木々が緑であるように、空が青いように。

私には翼が生えている。

お爺ちゃん、お婆ちゃんは相変わらずありがたやと日に一度は私を拌みに来たり、教会に行く人が増えたが、それ以外は殆どそれまでの日常と変わりが無かった。

私は両親と相変わらず農作業をして日々の糧を得て、慎ましい生活を送っていた。

しばらくして、母が流行り病で倒れた。

医学の発達していない当時は治らない不治の病だった。
母は隔離され、孤独に死に行く運命だった。

私はそれを受け入れることが出来なかった。
だから、また神様に祈った。

「母を助けて下さい。お願いだから、母を元気にして下さい」

翼が欲しいと願った時の比ではなかった。
ほぼ一日を祈りに費やし、教会にこもった。
村の人々も天使様ならもしかしたらと期待をしていた。

神様は祈りに応えた。
いや違う。

私が期待に応えてしまった。

再び私は偽物の世界を信じた。
二度、私の祈りは世界を捻じ曲げた。

母の病は治ったのだから。

でも、私の人生もここで大きく捻じ曲がってしまった。

第1話 「翼をください」(後書き)

よかった、一件でもお気に入りが入っていて、
、ありがとう
！！そして、ありがとうございます！！頑張ります。

第2話 「戦場、惨状」

天使の祈りは病を癒す。

この噂は瞬く間も無く広まった。

村から町へ。

町から街へ。

街から国へ。

「マリアちゃん！！娘の熱がさがらないの！？」

村の知り合いの病を癒し。

「助けてくれ、、、妻が、、、死にそうなんだ、、、」

知り合いでもない隣村の人の妻が産後の影響で弱っているのを助け、
、、、。

「金なら幾らでも払う、、我が領民の間に流行る病をどうかしてくれ!？」

貴族に頼まれ、知らない町へ赴き救いを振りまいた。

始めは少なかったが、次第にそれは増え、日に百を越す人々が私の元へ来た。

私も殆ど休むこともなく翼を広げ国中を飛び回った。

人々は私に群がった。

砂糖菓子を覆う黒蟻の様にわらわらと。

寝る間も惜しまず祈り、癒し、それでも見返りを求めず。

子供も大人も老人も。

平民も貴族も奴隷も。

神の慈悲は何者にも平等に。

神話の中の天使のように。

救えば救う程、救えれば救える程、私はそれが正しいと信じていった。

そうして、ある日、国から遣いが来た。

戦場で傷つく兵達を癒して欲しいとの願いだった。

その当時、私の住む国は、いや大陸全土にある国々が覇権を巡り争いあっていた。

私の住んでいた村は国の片隅、大陸の奥に位置していた為、その影響は殆ど無かった。

だから、知らなかったし見抜けなかった。

国から来た遣いは救いを求める人間の目ではなく、欲望に塗れた肉食獣のだったということに。

私は何の躊躇いもなくその申し出を受けた。

少しでも多くの人間が救えるのならと。

両親は私の意志に猛反対をした。

『小さな子供が生きて行けるほど生易しい場所じゃない！！それにそれは救いなんかじゃない！！』

私には分からなかった。

苦しむ人々がいるのに、死に逝く人々がいるのに、それを助けるのがどうして救いではないのかと？

今までやってきたことと同じことをしたいだけだというのに。

両親の言葉に従っておけばと今なら思える。
そうすれば最悪には行き着かなかったかもしれない。

私の意志という大儀の元に国からの遣いは私を攫うように村から離れ、戦場へと私を送り出した。
私の地獄はここから始まる。

『戦場の一日目』

数日後の夕暮れ近く、護衛の騎士数人と私は戦場近くの丘に辿りついていた。

私を迎えたのは怒号、罵倒、剣音、血臭、死。
遠くから眺めるそれは人と人が触れ合うことで起きているとは到底理解が追いつかなかった。

人が人を殺し、殺し合い、消えてゆく。
白と黒で分けられた人々が戦場の中央で混ざりあい、それでも灰色になることはなく、一つになることはなく。
理解しあうこともなく倒れ重なり合う。

その遠い現実、恐ろしい速さで、早さで私に近づいて撃ち抜いた。確実に私の人格は何かしらを書き換えられた。それ程の衝撃。

私は歩を進める。

思考をすることが出来なかった。

何を考えれば良いか分からなかった。

それでも私の足は動いた。

「おい!!」

自失していた私の肩を護衛の騎士が荒々しく掴む。

「何処へいくんだ!? アンタが行くのはそっちじゃない」

「?」

何を言われているのか分からなかった。言葉がぼやけて頭の中に入って来なかった。

ばやけているのは私の頭だったのだが。

「もうすぐ日が暮れる。そうすれば今日の戦は終わりだ。それまで待て、、、でなきゃお前みたいなのは一瞬で死ぬ」

その言葉と共に何処かで鐘が鳴る。

鐘の音と共にそれまでの狂騒が一気に引く。

日は完全に沈み、周りは殆ど闇に覆われていた。

混ざり合っていた白と黒も分かれ、一気に離れていく。

弓矢がまだ一部で飛び交っていたが、それも徐々になくなり、残されたのは黒い何か。

白は殆ど見えない。

それはきつと血に濡れているから。

完全な静寂に満ちた後、私の肩を掴んでいた手が離れる。

私はいつからか止めていた息を吐き出し、振り向いた。

そこには感情の読み取れない笑みを浮かべた騎士達が居た。

「戦場へようこそ、天使さん」

その言葉に私は自分が何処にいて何をしに来たのかを思い出し、
そして、胃の中の物を全て吐きだした。

第2話 「戦場、惨状」(後書き)

遅筆で申し訳ない。

次はもう少し早く投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402x/>

A sleeping forrest

2011年12月1日23時48分発行